

日本統治下の台湾における「能楽第一人者」小川尚義について

About the leading person of Noh play Ogawa Naoyoshi
in Taiwan during the period of Japanese occupation

王 冬 蘭
Donglan Wang

【目次】

- I はじめに
- II 渡台前
- III 在台時代
 - III-1 台湾に於ける能楽展開時期
 - III-2 台湾に於ける能楽展開内容
 - III-3 小川の能楽についての評価
- IV 松山への帰郷後
- V 結び

I はじめに

小川尚義(1869.3.21~1947.11.20)は傑出した言語学者である。近年、言語学者小川尚義に関する調査研究が展開されている。彼の漢語語音学における功績は、彼の生前に適当に評価されなかったが、死後七十年近く経った現在、世界的な学者として再評価されるべきという傾向にある。現在、国立台湾大学図書館には、主に小川尚義の著書を収集している小川文庫が常設されている。また、小川は能楽が達者であり、彼は生涯を通して能楽に打ち込んだ。1896年から1936年までの四十年間在台した小川尚義は、当時の台湾能楽界において「第一能力者」、「権威者」、「大家」と言われていた。

小川尚義の能楽についての本格的な研究は、まだ行われていないようであるが、2007年12月

に、当時関西大学の大学院生であった竹本淳が『『能海』と小川尚義』というタイトルで、「六麓会」¹⁾において口頭発表を行った。それは、台湾における能楽雑誌『能海』刊行の関連事情や、小川尚義が『能海』刊行に参加していた可能性の推察という内容であり、中に短い小川の略年譜もある。筆者は、『能海』には小川の文章の掲載があるが、小川を『能海』の刊行者ではないと考える。上記の他に、小川を紹介する資料、例えば、『愛媛県史』『愛媛能楽史』『愛媛人物博物館』などの資料には、小川の趣味が能楽であることについての簡単な紹介がある。しかし、小川の能楽についての詳しい研究は、管見の限りまだないようである。

本文は、小川の能楽の基礎養成、彼の生涯の各段階における能楽展開状況、台湾能楽社会におけ

る地位等について追及し、明らかにするものである。

以下、1、渡台前 2、在台時代 3、松山への帰郷後という三部構成にて展開する。

II 渡台前

小川尚義は、1869（明治2）年3月21日に、伊予国温泉郡（現在の愛媛県松山市勝山町）に生まれ、1872年5月に小川武一の養子となる。松山で中学を卒業後、1887年十八歳で東京の第一高等学校予科へ入学した。一時休学期間が有り、1893年9月に帝国大学文科大学博言学科（現東京大学文学部言語学科）へ入学した。大学在学中も、同郷人である正岡子規、高浜虚子、河東碧梧桐らと交流した。正岡子規の句「十年の汗を道後の温泉に洗へ」は、1896年に小川尚義が大学を卒業し、松山へ帰り、子規庵を訪れた際に正岡子規が詠んだものである。同年の10月に、台湾総督府学務部に勤務するために台湾に渡った。当時二十七歳であった。

小川尚義は能楽を松山ではじめた。小川尚義を幼小の頃から育てた養父母小川は、能を好んだ。毎年藩祖公の祠にて能を開催する時には、一家で観覧した。謡曲の稽古を初めたのは十六、七歳頃からであり、松山で叔父や近隣の長野という老人に習った。当時の稽古の流派については、まだ確認することができていないが、下掛宝生流ではないかと考える。というのは、当時の松山市においては、下掛宝生流と喜多流が盛んであり、後に小川が下掛宝生流の稽古しているためである。東京に出るまで、すなわち十六歳頃から十八歳までの二、三年間に、約七十曲を習った。十八歳で移った東京では、第一高等中学校時代からの同郷である正岡子規の叔父で、下掛宝生流の達人である藤野漸に師事したが、1892年に藤野漸が松山に帰郷することとなる。藤野漸は帰郷する前に、小川を当時東京に隠居していた下掛宝生流宗家の宝生

新朔（八代目）、宝生金五郎（九代目）に頼んだ。小川は学校の傍ら、一週間に二回ぐらいずつ宝生新朔のところに通い、能楽を習い²⁾、台湾に渡る前に下掛宝生流免許皆伝を受けた。しかし、免許皆伝を受けた時期については、資料により異なった記載がなされている。例えば『愛媛県史・人物』³⁾には、松山在住時代に下掛宝生流の皆伝を得た、というような表現があるが、『愛媛能楽史』⁴⁾には上京して宝生新朔、宝生金五郎に師事して免許皆伝を受けたと記載がある。小川の経歴から判断すると、宝生新朔、宝生金五郎に師事してから台湾に渡る前に免許皆伝を受けた可能性が高いと考える。

なお、東京での大学時代に、宝生新朔ら能楽師と松山に同行し、行事に参加したこともあった。また、下掛宝生流を習った正岡子規と一緒に能楽を観たり、子規の自宅で謡曲会をしたこともある。

図1は1894（明治27）年に宝生新朔が松山に行った際の写真であるが、小川も写っている。これは、台湾に渡る二年前のことである。

上記の事柄により、小川が台湾に渡る前、すなわち二十七歳までの間に、下掛宝生流宗家などについてしっかりと稽古を積み、免許皆伝を得るほどの能楽基礎を身に付けていたことが分かる。更に、松山にいた時も、東京にいた時も、同郷の能楽関係者に習ったのみである。小川の故郷松山は、古くから能楽の盛んな土地柄であり、その環境から影響を受けた。能楽の稽古を開始したことも、東京滞在中に故郷の達人、宗家の指導を受けたことも、松山出身であることに起因する。すなわち、松山は、小川が生涯をかけた能楽の、土台となった場所である。

III 在台時代

小川は1896（明治29）年に帝国大学文科大学博言学科を卒業し、同年台湾総督府学務部の勤務



図1⁵⁾ 2列右から4は宝生新朔、1列右から1は小川尚義

となった。そこでは、台湾語、ついで台湾原住民諸言語、漢語（中国語）語音についての言語研究を行った。総督府での勤務時間が長かったが、1928（昭和3）年の台北帝国大学の創立際に、文政学部言語学教室講師と嘱託され、1930年に同大学文政学部の教授となった。1936（昭和11）年3月に、六十七歳で台北帝大を退任し、松山に帰郷した。

Ⅲ-1 台湾に於ける能楽展開時期

台湾は、1895年に日本の植民地になった後に、急速に日本人が増加した。それから能楽も徐々に開始されたと考える。資料は確認できていないが、ゼロからのスタート、愛好者らが、個人的に小規模な形で、謡曲の謡いなどから開始したと考えられる。小川は、日本による台湾統治の翌年1896年に台湾に渡り、台湾総督府の務めとなったので、小川の渡台時期は、台湾における能楽愛好者の中ではかなり早い方である。初期に謡曲などを行ったかについては、関連する資料を確認できていないが、渡台前の能楽への熱心ぶりから考えると、個人的で謡曲等を行った可能性が高いと推察する。小川の渡台から四、五年後の、1901

年3月2日の『台湾日日新報』には、藤野漸の台湾訪問についての報道記事があり、そこには「宝生流小川尚義氏の師匠にて協謡の名人藤野漸氏」という表現がなされている。この表現から、小川は、1901年の時点で、すでに台湾現地において「宝生流小川尚義」として知られていたことが分かる。その後、新聞、雑誌における台湾の能楽に関する報道記事に小川尚義という名前がしばしば現れている。例えば日本国内の雑誌『能楽』第2巻9号（1904年9月）における「地方能楽界」欄の台湾台北のところには、喜多、観世、宝生三流合併謡会が開催され、参加者の一人小川について「宝生金五郎氏直伝の小川氏の出会にて一統謹聴感に堪へたり」と記載がある。この一文から、当時小川が現地の能楽関係者の中で、すでに権威者のような存在であったことが窺い知れる。その後も、海外研究調査や帰国を除いて、台湾にいる間謡曲、囃子を継続して行っていた。

Ⅲ-2 台湾に於ける能楽展開内容

小川は台湾滞在中、諸方面で能楽に参加したが、下記の通りまとめることができる。
能楽を演じた。

1905（明治38）年からは毎年、台北で建造された北白川宮能久親王を祀る台湾神社での奉納能を実施した。1905（明治38）年10月は、喜多流宗家喜多六平太が台湾に渡り、演能したが、その後台湾の能楽関係者観世、宝生、喜多三流合同で奉納能を上演するのが恒例となった。小川が、1909年10月27、28日に台北神社で行われた奉納能楽で、「高砂」「熊坂」「船弁慶」「鉢木」「土蜘蛛」の演能に携わった記載がある⁶⁾。その後の奉納能へも、仕事の都合が許す限り参加していたようである。

ラジオ放送謡曲も担当した。「放送日誌」における謡曲放送には小川尚義の名前が記されている⁷⁾。

葛野流の大鼓の達人として活躍した。

小川の大鼓は台湾で高く評価された。台湾では、大鼓をできる人が少数であったため、小川が葛野流の大鼓の達人として活躍し、台湾における能の展開を支えた。当時の下記の報道で、この事情を窺い知ることができる。

大鼓は小川尚義君の殆ど専売で是は一寸真似が演難いので餘り稽古する人も無いが、太鼓の方は大分ある⁸⁾。

しかし、小川が大鼓について、どこで誰に師事したかについては、まだ確定することができていない。恐らく、東京にいた間に習ったのではないかと考えている。また、大鼓上達の他の重要な要因として、下記の事柄もある。同郷の大鼓の権威者であり、後の人間国宝である川崎九淵の弟子吉見嘉樹が一時破門され、1917年に台湾に渡った。吉見嘉樹が在台した十数年間に、小川が大鼓の達人である吉見に習い、上達した。また、小川が吉見に大鼓を習った縁で、吉見とその師である川崎九淵の間を取り成し、川崎から破門を許して貰ったという事もある⁹⁾。

稽古の指導をした。

小川は、忙しい研究の傍らで、能楽稽古指導も行ってた。文献において、小川が台湾総督府で同僚に謡曲などを教えるという内容の記載があるし、また、1914年12月の『新台湾』における記事¹⁰⁾には下記のような内容がある。

台湾にはお弟子も相応にある、月謝要らずにお師匠様の方から押掛教授といふ熱心家である

短文ではあるが、三点のことが読み取れる。①多数の弟子。②月謝要らず③押掛けて指導する程の熱心家である。

小川の熱心な指導の下、弟子の中にはよくできるようになる人も少なくなかった。「台湾の謡曲界」¹¹⁾「台北の謡曲界」¹²⁾という記事には、小川の弟子の名前も記載されており、人数は十人を超えている。

指導の内容について明記している資料はまだ見つかっていないが、小川は「能楽全体に涉って心得て居られる」¹³⁾であるので、指導内容は広範囲に渡ることができたであろうが、主に謡いや囃子を指導したと考えられる。

台湾能楽組織での役職を担当した。

小川は学生時代から下掛宝生流を習っていたという記事は散見されるが、彼が宝生流を習ったということに関する記事はまだ見つかっていない。それにも関わらず、小川が宝生流にも属した可能性があると考える。というのは、小川が宝生流の謡曲会行事に参加した記録があり、能楽シテ方宝生流の組織「宝生会」で役職を担当した記録もあるからである。

例えば、『台湾日日新報』1912年1月20日における「宝生流謡曲会」という報道には「当流謡曲家小川尚義（略）の四氏発起人とたる来る二十一日午前九時より□□□おいて謡曲大会開催」とい

う内容がある。小川が当時の宝生流謡曲大会発起人の一人であったことが分かる。

また、昭和10年版『能楽年鑑』における「台北宝生会」の部分の内容によれば、小川は、当時台北宝生会の顧問であった。台北宝生会は会員が二百五十名前後の、「歴史が長い会である。他流に対する宝生流の代表機関である」¹⁴⁾。小川は1935年の時点で宝生流の顧問であったが、いつからその役職に就いたかは、確認できていない。

高砂会の重要人物であった。

高砂会は、台北における観世、喜多、宝生流という流派を超える謡曲組織である。1909年の新聞には、高砂会に関する記載があり、その時期すでに存在していたことがわかる。1915年から休会になり、1919年に活動を再開した。小川が高砂会復活発起人の一人である。

Ⅲ-3 小川の能楽についての評価

小川氏の能楽については、台湾において一貫して高く評価されていた。例えば、「台北の謡曲界」(十)¹⁵⁾には、下記のような内容がある。

小川尚義氏 何といっても斯道の大家全島謡曲界に於いては先づ御師匠株は別として氏の右に出づるものはあるまいとは公評である。

また、「台湾の謡曲界」¹⁶⁾という文には下記のような評価がある。

(略) 茲に台湾総督府学務部編輯課長編輯官従五位勳六等文学士小川尚義と云ふ御大将がある、目下病気の為め帰国中であるが、流石に胎の中から謡曲や鼓の音を聞いて居られた丈旨いものである甞に斗謡曲りぢやない、能楽全体に涉つて心得て居られる(略) 小川君は台湾各流の謡曲家を通じ

ての第一人であるのみならず、東京へ出て同輩では有数の豪傑である(略)

以上の評価を総括すると、小川が台湾の能楽社会で最も評価された存在であり、「第一人者」といわれていたことがわかる。それゆえ、小川は台湾の能楽社会で尊敬され、彼が仕事の関係で台湾を出たり、あるいは台湾に戻る際には、台北で小川尚義送迎謡曲会が開催され、その送迎謡曲会開催情報については『台湾日日新報』に連載された¹⁷⁾。

Ⅳ 松山への帰郷後

小川は1936年に当時の台北帝国大学を退任した。また同年『原語による台湾高砂族伝説集』により、学士院恩賜賞を受けた。退職後松山に帰郷し、その後七十八歳で亡くなるまでの十余年を松山で過ごした。松山に帰郷後も、言語研究を継続し、本の校正、論文の執筆なども行った。言語研究の傍ら、以下の諸方面で能を継続した。

能の上演へ参加した。1936年10月25日に、「下掛宝生流洋会例会、第三百回記念能」に参加し、「松風」を謡い、能「杜若」の大鼓を打った。

謡曲や大鼓の指導をした。1939年の頃から、下掛宝生流能楽師宝生弥一に乱曲を教えたことがあるようである。当時若かった宝生弥一が乱曲を習いに来て、小川は先代家元の写真を飾り、「一緒に謡いましょう」と言って宝生弥一に伝えた¹⁸⁾。

また、伊藤秀夫という人に葛野流大鼓を指導した。戦後、伊藤秀夫は松山商科大学学長を勤めながら、大鼓方としても活躍した¹⁹⁾。

Ⅴ 結び

以上、まとめてみると、小川尚義の能楽は、松山→台湾→松山というルートで進展したことがわかる。台湾に渡る前に、能楽が盛んである故郷松山で謡曲の稽古を開始し、東京での学生時代に

も、松山出身の下掛宝生流の名人らについて習い、名人指導の下、高い技量を身に着けた。そして、台湾に滞在した四十年間、能楽に対する熱意と高い技量により、台湾の能楽を支える存在の一人となった。退職を機に松山に帰郷した後も能楽を継続し、尊敬された。小川尚義は、台湾能楽史にも、松山能楽史にも重要な存在であると考えらる。

小川尚義略年譜

1869年3月21日、伊予国温泉郡（現在の愛媛県松山市勝山町）に生まれる。

1872年5月、小川武一の養子となる。幼小の頃から家族と能楽を観覧。

1883年、松山中学卒。

1885、86年 十六歳頃に謡曲の稽古を始める。叔父や近隣の長野という老人などに習い、十八歳までに七〇番位を完成。

1887年9月、十八歳で第一高等中学校予科入学。在学中下掛宝生流の藤野漸に師事。しかし89年脚気のため一時休学。

1891年 本科一部（文科）に進学。

1892年 藤野漸が故郷松山に帰郷するため、宝生新朔に師事。1896年まで続け、免許皆伝を受ける。

1893年9月、帝国大学文科大学博言学科（現東京大学文学部言語学科）入学、上田万年に師事。

1896年、帝国大学文科大学博言学科卒。同年10月から、台湾総督府学務部に勤務。台湾語、台湾原住民諸言語について研究。台湾総督府国語学校（現在の国立台北教育大学、台北市立教育大学）教授、台北高等商業学校校長兼任。

1928年 台北帝大文政学部言語学教室講師（嘱託）

1930年、台北帝大文政学部教授。

1936年、台北帝大退任。

学士院恩賜賞を受賞。

故郷松山に帰る。

1947年11月20日没。享年七十八歳。

- 1) 関西における能楽研究会。
- 2) 小川が記者のインタビューに応え述べた内容による。（『謡曲家としての小川尚義氏』一記者。『新台湾』「台湾に於ける天下の人物」欄、1916年4月10日）。
- 3) 『愛媛県史・人物』（発行 愛媛県 1989年）。
- 4) 『愛媛能楽史』（著者 森松幸夫、発行 社団法人愛媛能楽協会 1989年）。
- 5) 写真は『愛媛能楽史』による。
- 6) 『漢文台湾日日新報』1909年10月27日
- 7) 『放送日誌』（台湾通信協会 1925年）による。
- 8) 『台湾の謡曲界』（『新台湾』1914年12月16日）。
- 9) 『愛媛能楽史』「3、松山文化人逸話」による。
- 10) 『台湾の謡曲界』（『新台湾』1914年12月1日）。
- 11) 『台湾の謡曲界』（『新台湾』1914年12月1日）。
- 12) 『台北の謡曲界』（『台湾日日新報』1909年4月27日）。
- 13) 『台湾の謡曲界』（『新台湾』1914年12月16日）。
- 14) 『能楽年鑑』（昭和10年版 謡曲界編纂）。
- 15) 『台湾日日新報』1909年4月27日。
- 16) 『台湾の謡曲界』（『新台湾』1914年12月16日）。
- 17) 『台湾日日新報』1916年9月28日、1918年4月13日、1936年3月12日
- 18) 『愛媛能楽史』による。
- 19) 松山に帰郷後の能楽の内容は『愛媛能楽史』による。

〔付記〕本研究はJSPS科研費JP16K02385の助成を受けたものです。